ペラグラの多くは，不摂生な食事やアルコール多飲に起因する可能性が高く，また皮膚炎を生じにくい特徴がある．画像検査が正常な上，血清ナイアシン値測定が容易でない点も診断を困難にしている一因である．診断されず，補充もされずアルコール性譫妄・精神病と誤診され，死亡する例もある．ペラグラは過去の病気ではない．姿を変え日常診療で遭遇する可能性があり，検査，早期診断，治療が容易になることが望まれる．

（令和4年1月例会）

我が国の腑分けの歴史と近代整形外科の父・各務文献

今井　秀

1. 我が国の腑分けの歴史

腑分けは701年に制定された『大宝律令』で初めて明文を以て禁じられたと推測される．江戸時代に徳川幕府は朱子学を官学に採用し鎖国政策を断行した．それゆえ儒教の「招魂再生」死生観から腑分けはいっそうタブーとされた．

ところが8代将軍吉宗の享保の改革で，1720年にキリスト教以外の洋書輸入が解禁され西洋の解剖書が流入し，また1742年に制定された「御定書百箇条」で罪因ごとの処刑方法が細かく規定され，死罪は斬首後財産が没収され死体は試し斬りの後埋葬や弔いも許されなかった．しかし山田浅右衛門で知られる御様御用には，試し斬りに準じて腑分けも許可されたようである．

そのため，山脇東洋は官許を得て1754年に我が国で初めて京都の六角獄舎で行われた腑分けに立ち会い，5年後に『蔵志』を著した．この東洋の実証的科学精神はその後の我が国における医学発展の口火を切った．

1771年には杉田玄白と前野良沢らが江戸千住の小塚原刑場で行われた腑分けに立ち会い，所持していた『ターヘル・アナトミア』の解剖図の正確なことに驚愕し，この書の翻訳を志し三年半の苦難の末に『解体新書』が刊行された．これは我が国における蘭学勃興の端緒となり，近代医学の幕開けとなった．

2. 整骨医による腑分け

江戸時代後期に整骨医二人が腑分けを行った．ひとりは広島の星野良悦で，1792年に広島藩から海賊の刑死体二体を貰い受け一体で内臓を観察し，もう一体で全骨を得て「星野木骨」を作製し，1800年に幕府医学館に献上した．

もうひとりは大阪の各務文献で，はじめ産科を志し1800年に官許を得て大阪葭島の今木刑場で橋本宗吉の絲漢堂の仲間・伏屋素荻と大矢尚斎と共に腑分けを行い『婦人内景之略図』を著した．しかし文献はこの解剖に満足することなく次第に人体の骨骸に興味を抱き，整骨医こそやりがいのある新しい分野だと考えた．

3. 整骨医を志した各務文献

文献は『整骨新書』凡例の冒頭で「整骨ノ術ハ醫門ノ一科ニシテ，救済ノ道ニ志ス者識得セズンバアルベカラズ」と述べているように整骨医を志した．

昭和3年の大阪史談会で，浅田宗伯高弟の中野康章は「文献嘗て整骨を難波村の整骨師伊吹堂年梅氏に就いて尋ねた．然るに年梅これを伝えなかったので，文献は“これ骨格の連絡を知らざるにあり”と怒を発した」と語っている．

文献は早速年梅佐左エ門に入門したが，年梅氏は支那の陳腐な言を守り経験に頼り施術を行い，それを奥義として術を教えなかったので整骨術は真骨による骨関節機構の研究より始めるほかないと文献は刑屍の解剖を志したという．

4. 木骨の作製から整骨術への応用

妻の黒井氏とともに文献は夜陰に紛れて葭島の刑場から屍体を持ち帰り真の骨骸を収集し解剖し

た．また工人田中某に命じ等身大の全身骨格模骨「各務木骨」を作製した．

さらに座右用の実物1/3大の小木骨をもう一体作り，弟子達に骨関節の解剖を熟知させ，按撫して骨折や脱臼の整復法を教えた．そして運動作用の理を推究し整骨術を実施し，器械を精製し施術に便宜を図り，揺動から患部を護（まも）るため副木や包帯などで固定を行い，また重傷例には自ら創薬した曼陀羅花と白蛇（びゃくだ）の二味からなる麻睡散（ますいさん）で全身麻酔を施すなど，多くの創意工夫を重ねた．

5.『整骨新書』出版と木骨の献上

文献は研究の成果を1804年に『整骨撥乱』（内題「接骨発揮」）としてまとめ，1810年にその草稿を加筆・修正し集大成して『整骨新書』を出版した．とりわけ巻首の「各骨真形図」は極めて精緻な骨の解剖図譜である．

数年来病床に伏していた文献の命を受け，弱冠9歳の門人中山樹（後に娘婿となる相吾・東風軒）は1819年春に「各務木骨」と文献の直筆草稿である『摸骨呈案』を携え江戸に往き，幕府に献上した．望みが叶い満足した文献は10月14日に65歳で没し夕陽丘浄春寺に葬られた．

6. まとめ

各務文献は生来の済世（ひとをすくふ）の志と正義感から整骨医を志した．しかし陳腐な中国伝来の施術を妄信し経験に頼り施術を行い，またそれを秘伝とする整骨師に憤りを覚えた．そこで実証的科学精神から真骨収集し自ら解剖を行って骨関節機構を解明し，さらに等身大の全身模骨「各務木骨」を作製した．

努力家で器用な文献は親試実験を重ね新たな整骨術を開発し，座右に置いた小木骨で弟子達を指導した．その成果をまとめ『整骨新書』を刊行し，さらに最晩年には望みが叶い「各務木骨」を幕府医学館に献納した．

今日の整形外科医療の基礎を作り近代化に寄与した整骨医各務文献は，まさに我が国「近代整形外科の父」と称するに相応しい人物であると思われた．

（令和4年1月例会）

日本経済の父渋沢栄一の社会事業について

稲松　孝思

渋沢栄一（1840–1931）は日本資本主義の父と言われる経済人であるが，若年時より社会事業に関わっている．生前はお金持ちの道楽の慈善事業と見做されることが多かったが，土屋喬雄は彼の社会事業の重要性を指摘している．1970年頃の美濃部都政下で，一番ケ瀬康子は養育院100年史を監修する課程で，渋沢の社会事業家としての貢献に気づいた．しかし，当時の福祉領域の学会では，資本家で，国家の手先の渋沢を持ち上げるのは怪しからんと言う反応だった．1999年，渋沢研究会20周年記念出版「公益の追求者渋沢栄一」で，長沼友兄，山名敦子，金澤貴之，平井雄一郎らが社会事業家としての渋沢像を描いている．2010年，大谷まことは渋沢を社会事業家として評価する大著を出版している．私はこの頃から本学会で，養育院の成立について発表を始め，2020年に渋沢研究会30周年記念出版「はじめての渋沢栄一」で，福祉領域での活動について述べた．2019年杉山博昭は福祉領域での渋沢の貢献を，2021年武井優も養育院と渋沢の関係について出版している．この間，薩長史観に偏る明治維新や資本主義，新自由主義の見直し，GAFA批判，持続する開発目標重視などから，これまでの渋沢像の見直しが必要になっている．そのような中で渋沢は，NHK大河ドラマのヒーローや，1万円札の肖像に取り上げられ，その公益を重んじる行動が評価されるようになった．

「渋沢栄一伝記史料」全68巻に集められている